

# 農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

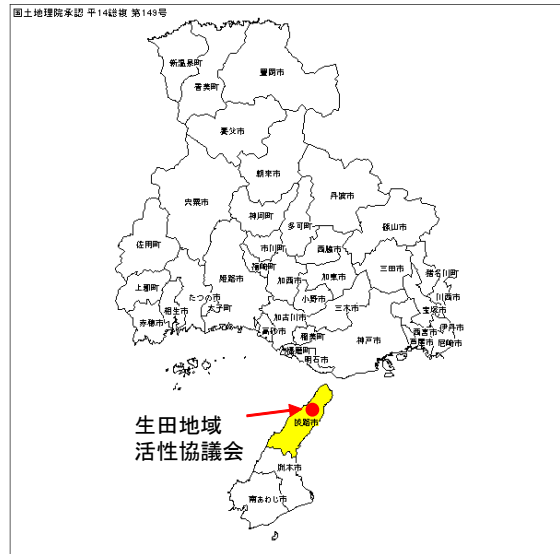
「本物」にこだわったむらづくり

いく た ち い き かつ せい  
受賞者 生田地域活性協議会  
ひょうごけん あわじし  
(兵庫県淡路市)

## ■ 地域の沿革と概要

淡路市は、淡路島の北部から中部に位置し、東に大阪湾、西に播磨灘を臨み、世界最長の吊橋である明石海峡大橋で神戸市とつながる交通の要所である。総面積184.28km<sup>2</sup>を有し、淡路島の約3割を占め、東西の距離は23.7km、南北は21.9kmで平成17年4月1日に津名郡5町（津名、一宮、北淡、淡路、東浦）が合併した人口5万人弱の市である。気候は、温暖で降水量の比較的少ない瀬戸内海気候に属しており、年間平均気温は15～17℃、年間平均降水量は概ね1,500mm前後である。地形は、まとまった流域を有する河川が少ないのが特徴で、その分、貯水用のため池が多く見られる。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

生田地域は、旧北淡町以前は旧育波村に属していたが、それより前は生田大坪・生田畑・生田田尻の3集落からなる生田村であったことから、地域として生田村への愛着が強かった。そのため、明治時代に建設された歴史ある小学校は、“生田小学校”と命名された。

少子化が進む中、地域の熱意で小学校を存続させてきたが、平成22年に生田小学校が廃校となり、併設さ

第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	集落の集合体
地区の性格	機能的な集団等
農家率 (内訳)	47.3%
	総世帯数 146戸
	総農家数 69戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 12戸
	1種兼業農家 7戸
	2種兼業農家 50戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 511ha
	耕地面積 47ha
	田 45ha
	畑 2ha
	耕地率 9.2%
	農家一戸当たり耕地面積 0.7ha

れていた生田保育所も廃園となった。

現在の生田地域は、人口424人（146世帯）、農地面積47haの農村地域である。棚田が広がる耕作条件の悪い中山間地域の米単作地帯で、農業収入だけでは生活が困難であるため、若者の流出が続き、少子化に加え過疎化が進んでいる。



写真1 生田の風景

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機、背景

#### ア 水利権を超えた危機感と目標の共有

降雨量が少ない淡路島では、田主（たず）と呼ばれる特有の水利権者の組合が組織され、営農時の水利用が複雑であるという歴史的背景があることから、農村集落が共同で農業生産活動に取り組むことが困難な土地柄であった。生田集落は標高50～300mにまたがる農村地域であり、耕作条件の悪い棚田が広がる中山間地域で米の単作を行っていたが、農業収入だけでは生活が困難となっていた。また、公共交通機関がないなど生活面でも不便な地域である。こうしたことから、若者の流出が続き、少子化・高齢化に加え過疎化が進んでいる状態であった。

そうした中、過疎化・高齢化により活力を失いつつある地域の現状を憂い、かつての活気のある農村風景を懐かしむ人々から、当時の農村風景のシンボルである水車の復元を望む声が聞かれるようになった。

こうした些細なきっかけではあったが、旧生田村（生田小学校区）という地縁的なつながりの中で、水利権が異なる3つの集落が現状を真摯に受け止め、住民全員参加の地域活性化という目標を掲げ、連携して活動していこうとする動きが生まれた。

#### イ 成功体験が後押しした地域活性協議会の設立

平成18年頃から、地域活性化に向けた農地・水・環境保全向上対策事業への参加の検討が始まり、話し合いを契機として、3集落で地域活動の中心的役割を担う人々が少しずつまとまり始め、実務的な話し合いが何度も行われるようになった。

その後、各集落で「農水会」という組織を結成し、農水会同士が話し合いを重ねて交流を深める中で、平成19年に3集落の農水会が合意に至り、事業に参加することとなった。また、3集落がまとまるにつれ、水車復

元という目標も同時に話し合われるようになり、各集落の農水会はむらづくりを視野に入れた組織となっていった。

同年の夏には3集落の共同活動として、全住民参加の下、そばの播種を行った。当時、他地域において、景観形成作物としてはヒマワリやコスモスの植栽が主流であった。生田集落では、他にない花を植えようという機運が高まって真っ白な花を咲かせる「そば」に着目したが、うどん文化の淡路では珍しいことであった。そして、そばの花が咲き始めた頃、地域活性化の第一弾として「そば花まつり」の開催が検討され、地域イベントとして正式に実施することになった。

第1回目の「そば花まつり」は、イベント開催決定後2週間で準備をしたが、参加者が700名を超える大盛況であったため、地域は大いに盛り上がり、まつりの継続を目標に掲げることとなった。この「そば花まつり」という地域活性化イベントが契機となり、町内会、老人会、子供会等地域活動を行う各種団体代表を加えた「生田地域活性協議会」が結成されることとなった。

その後、この協議会が中心となり、そばの栽培と6次産業化、活性化拠点の整備、都市住民との交流等が展開していくこととなった。

## (2) むらづくりの推進体制

### ア 生田地域活性協議会

生田地域活性協議会は、生田の自然環境、生態系の保全を通じて生田地域のコミュニティづくりを進め、活力ある地域づくりと、都市住民等他地域の人々との交流を深める活動を進めることを目的に、平成19年9月に結成された。

協議会は、3集落の農水会と中山間地域等直接支払制度の役員等農業者が中心メンバーとなり、3つの町内会、3つの老人会、スポーツ21生田、生田五尺節保存会などの計12団体で構成されている。

日常的な意見交換や意見集約は、5つの中山間各地区（農会単位）が地区ごとに年数回開く全体会（全世帯が参加）を通じて行われ、役員会に反映される体制をとっている。全体意見は、年1回開催される総会で集約される。

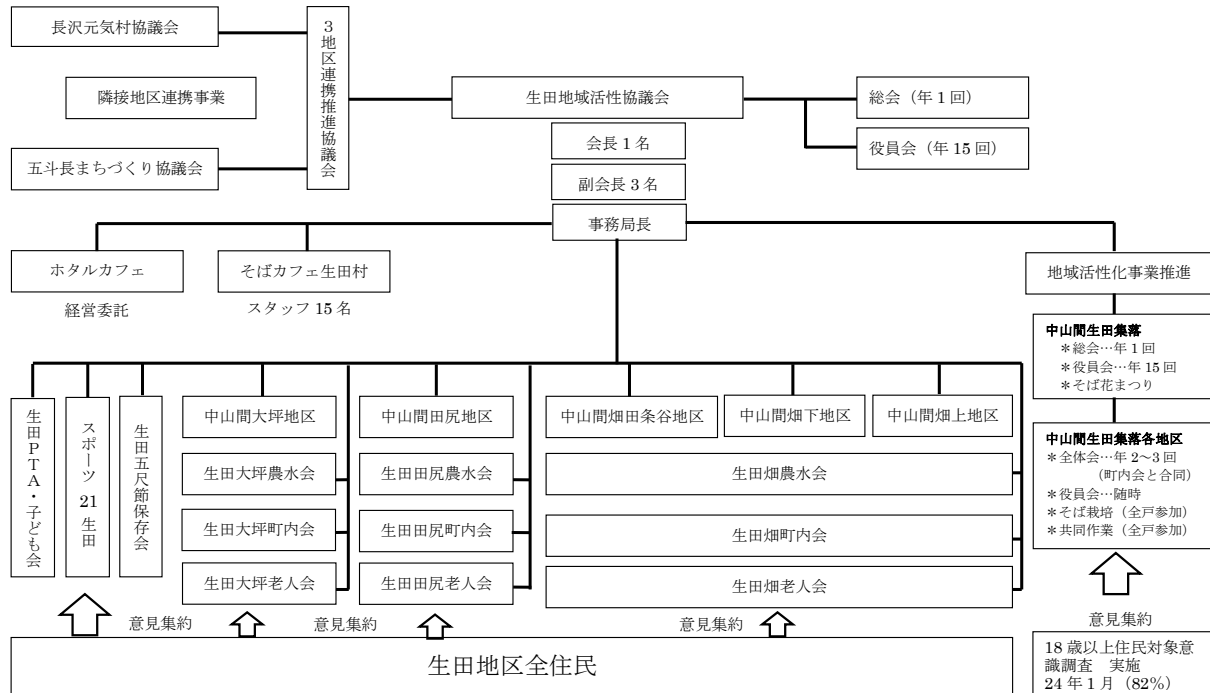
協議会の計画や事業については「生田村かわら版」という広報誌が全世帯に配布され、事業への参加の呼びかけなどが行われている。

### イ 3地区連携推進協議会

生田地域に隣接する五斗長<sup>こつさ</sup>地区及び長澤<sup>ながさわ</sup>地区では、それぞれで地域

活性化の取組が行われているが、生田地区と合同で「3地区連携推進協議会」を組織して連携することにより、点である3集落を線で結ぶ取組を実施し、案内看板の設置、写真コンテスト、マップ作成、電動バイクの導入など、交流人口の増加や活動の活性化のための連携事業を進めている。

第2図 むらづくり推進体制図



## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

生田地域活性協議会は、結成以来「そば花まつり」を継続開催し、平成25年で7回を数えている。参加者は年々増加し、現在では数千人規模のイベントまでに成長している。

また、廃園となった保育所を活用した拠点施設に併設するそばカフェ生田村は、淡路島初となる地元産そば粉を使ったそばを土日祝日に提供することにより、年間1万人が訪れる淡路の新たな名所となっている。

さらに、「よそ者目線」で地域の魅力を再発見するため、島外の女子大学の学生と意見交換を行い、若年層や女性にターゲットを絞った「ホタルカフェ」を整備している。カフェの経営は、東京からIターンで移住した夫婦が行っており、移住者の雇用確保につながっている。

現在、生田集落だけではなく、地域おこしに取り組む周辺集落と連携することにより、点である3集落を線で結ぶ取組を進めているところである。

## 2. 農業生産面における特徴

### (1) 耕作放棄地の解消とあらたな生産

生田地域では、合意形成が難しいことを理由に、中山間地域等直接支払制度への参加を見送ってきた。しかし、制度への参加が地域活性化につながることを協議会の役員会で確認されたため、平成20年度から制度に取り組むこととなった。

耕作放棄地対策の景観形成作物として始まったそばの栽培は、栽培面積が取組当初の0.7haから1.5haに拡大し、非農家を含めた全住民が参加する地域の共同活動として行われている。地域全体でそばの栽培を進めることに加え、個々の農家もそばの栽培を行うようになったことから、生田集落の耕作放棄地は解消されつつある。

あわせて、手作業であったそばの播種・刈取りについては、そばの活用が軌道に乗るにつれ、製粉機・脱粒機・播種機・管理機の導入などで機械化を進めており、地域活性化の基盤はソフト・ハード両面から強化された。



写真2 集落総出のそば播種

### (2) そばを活用した6次産業化の実現

収穫したそばについて、当初は年越しそば用として集落全世帯に配布するのみであったが、住民の中で「美味しい」との評判が広がり、「そばの店が出せないか」という声が上がりはじめた。このため、農林水産祭などの地域イベントでそばを屋台販売し、集落外の評価を受けたところ、多くの称賛をいただき、商品としての品質に自信を得た。

現在は、地域の店舗でそばを提供することにより、収穫したそばに付加価値を付けて6次産業化を実現しているほか、住民の雇用にも寄与している。

### (3) 周辺農畜産物の活用

「そばカフェ生田村」においてそばを提供するに際し、協議会は地元で採れる野菜や古代米、淡路市の平飼養鶏場の鶏卵、洲本市の合鴨農法の合鴨肉などを活用したメニューを考案し、周辺で生産される農畜産物の活用に寄与している。

### 3. 生活・環境整備面における特徴

#### (1) 廃園の保育所を利用した活性化拠点のフル活用

そば花まつりの成功など、地域に一体感が出てきた頃、地域コミュニティを発展させるため、廃園となった生田保育所を市から借り受け、平成23年4月に「生田村交流ひろば」をオープンした。ここでは、「ふれあい喫茶」「そば打ち教室」「フラダンス教室」「パソコン教室」「習字教室」「100歳体操」等、文化教養講座から健康教室まで、年齢性別を問わず誰でも参加できるプログラムを実施しており、年間4,000人が利用している。運営側にも、若い世代がインストラクターとして参画している。

また、そばを活用した地域活性化として、生田村交流ひろばに併設する「そばカフェ生田村」を整備した。淡路島初の取組となる地元産のそば粉を使った「挽きたて、打ちたて、ゆがきたて」のそばに加え、古代米や周辺で生産される合鴨農法の合鴨肉、平飼い卵など、こだわりの農畜産物を活用し、人気メニューを提供している。土日祝日の営業であるが、年間1万人が訪れる淡路の新たな名所となっている。

「そばカフェ生田村」のスタッフは、当初有償ボランティア（時給400円）で行われていたが、現在は県の最低賃金を保証し、男性5名、女性13名がローテーションを組んで働いている。比較的若い層の新たな参画もあって、協議会の事務処理など実務面についても後継者が育ちつつある。

多くの都市住民が訪れる「そばカフェ生田村」の存在は、集落に賑わい<sup>にぎ</sup>をもたらすとともに、安定した黒字経営を実現することにより、農家にとってそば栽培への励みとなっている。



写真3 そばカフェ生田村



写真4 本格手打ちそば

## (2) 「水車の復元」と「ホテルカフェ」

平成24年度には、活性化の取組の発端となった「水車の復元」をホテルの生息地である田尻川沿いに実現した。こうして、生田集落として、水車とそばという、農村風景を彩る2つのシンボルを得ることができた。



写真5 ホテルカフェから水車を望む

また、よそ者目線で地域の魅力を再発見するため、神戸親和女子大学の学生と数回にわたって意見交換交流会を行った結果、そばカフェ生田村の姉妹店として、若年層や女性にターゲットを絞ったカフェを整備することとなった。そして、平成25年4月には、初夏にホテルが乱舞し、昔ながらの水車が回る風景が見られる田尻川沿いに「ホテルカフェ」をオープンした。当初は、20歳代を最年少とする地元の女性たちが運営していたが、平成26年度からはIターンによって東京から移住した40歳代の夫妻（生田集落に住居を検討中）に経営を委託し、就労の場を提供している。

「ホテルカフェ」では、獣害防止のために放牧しているヤギのミルクを使ったプリンやそば粉を使ったシフォンケーキをメニューに加えるなど、地域の特徴を活かしたメニューも提供しており、地域内外から愛されるカフェとして運営されている。

## (3) 広がる都市住民との交流

協議会発足の契機となった「そば花まつり」は、地域の女性たちが「そば花ガールズ」としてフラダンス教室の成果を披露するなど、迎える住民にとっても楽しみの場となっている。協議会は、「夏休み親子そば打ち体験」を開催したり、観光マップを作成したりするほか、平成26年の秋からは「生田村の文化財を巡るウォーキング・ツアー」を企画している。



写真6 そば花まつり

また、生田集落だけではなく、遺跡（弥生時代後期の鉄器工房）を核とした地域おこしに取り組む五斗長集落や、廃園となった保育所の調理室を改修し、特産の自然薯を使用したメニューを提供して地域おこしに取り組む長澤集落と連携することにより、都市住民を広域に呼び込む取組を進め

ているところである。

さらに、協議会発足後、観光として訪れる都市住民だけでなく、地域への移住者を歓迎する機運が高まり、ほぼ毎年1組以上の家族（単身含む）が生田集落に移住している。

#### （４）環境に配慮した取組で農村風景を保全

平成23年12月に、兵庫県、淡路市等は総合特別区域法に基づく「あわじ環境未来島特区」の指定を受け、「エネルギーの持続」「農と食の持続」「暮らしの持続」の総合的な取組として、自然・環境を大きなテーマとした地域づくりが進められている。その一環として、「そばカフェ生田村」に太陽光パネルを設置したり、地域の間伐材や雑木を燃料として活用できる暖炉を整備したりすることにより、再生可能エネルギーの活用を積極的にPRしている。太陽光発電の余剰電力は売電され、わずかではあるが協議会の収入源となっている。

また、「ホタルカフェ」に併設した水車小屋に小水力発電の機能を付加したり、ホタルが棲息できる環境づくりのために河川の清掃や農薬使用の低減などに取り組んだりしている。ホタルについては、安易に養殖のホタルを導入することなく、在来種の保護と増殖を目指している。



写真7 田尻川の天然ホタル

さらに、獣害防止策としてヤギを飼育することにより、獣害の防止やヤギミルクの生産のほか、都市住民が農村の原風景を体感できる空間づくりに一役買っている。